

# 義務教育における体育科普遍的カリキュラムの確立に向けて

専攻 教科領域学  
 コース 生活・健康・総合内容系  
 学籍番号 M10243D  
 氏名 佐々敬政

## 目的

戦後の体育科学習指導要領は、生活体育から体力向上系統主義体育を経て楽しい体育へ、そして平成20年学習指導要領では、また系統主義への色合いが濃くなるなど、およそ10年ごとに改訂されている。このように、カリキュラム編成の基準となる学習指導要領に軸が見えない現状がある。そこで、本研究では、どのような時代になろうとも通用する、科学的根拠に裏打ちされた普遍的なカリキュラムを作成しようとした。

具体的には、第1章で、カリキュラム編成における基礎的な考察を行った。第2章では、学習指導要領の低学年に「遊び」という文言が見られることから、「遊び」の先行研究の整理を通して授業への指針を見出し、第3章で、低学年の単元配列レベルでのカリキュラム試案を提案した。そして、第4章・第5章では、「基本の運動」領域の中でも、系統性の強く見られる「器械・器具を使つての運動遊び」、「水遊び」についての2つの実践を行い、その成果と課題から普遍的な単元カリキュラムの作成にせまろうとした。

## 第1章 体育科カリキュラム作成に向けての基礎的考察

文献研究を通してカリキュラム編成の原理を導き出す。具体的に、カリキュラム類型の整理、カリキュラムの構成要素の関連性、カリキュラム作成者を観点にした構造化、戦後の体育科学習指導要領の特徴と課題の整理、運動発達からのシーケンスの設定を行い、領域レベルでのカリキュラム試案を提案した。

その結果、カリキュラムの編成にあたっては、①学問的・文化的要請から設定されるスコープ (scope) と、学習者の心理的・成熟的要請から設定されるシーケンス (sequence) の交点に教育内容が措定されなければならないこと。また、②目標としては、技能的特性や機能的特性に触れた楽しさを感じさせ人格を豊かにすること、③「身体の教育」「身体を通しての教育」「運動の中の教育」「運動についての教育」の4つが普遍的に求められることの3つの示唆が得られた。図1は、これらを踏まえ、カリキュラムの構成要素とその関連をまとめたものである。

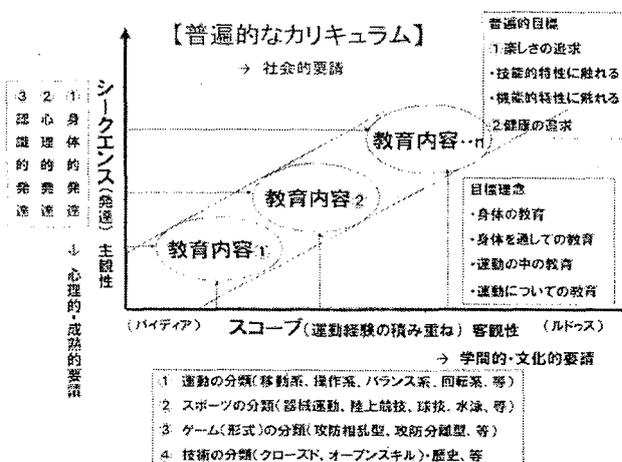


図1. カリキュラムの構成要素の関連

表1. 領域編成レベルでのカリキュラム試案

運動分類	小12	小34	小56	中
①操作系	基本の運動		体づくり運動	
②足による移動	・用具操作		陸上運動	陸上競技
③変形姿勢での移動・回転	・走・跳		器械運動	
④特殊な環境での移動	・器械器具			
	・水	水泳		
⑤リズムに対応	・表現リズム		ダンス	
	・力試し		武道	
⑥人に対応	ゲーム		ボール運動	球技
⑦人と物に対応	攻防分離	過渡的	攻防相対	

このような原理を踏まえ、子どもの「運動発達」と文化としての「運動種目」の両面から考究し、表1のような領域編成試案を提案した。

## 第2章 体育科における「遊び」の定義と

### 実践における有効性と可能性

本章では、文化史の観点からホイジンガ、社会学の観点からロジェ・カイヨワ、哲学の観点からジャック・アンリオ、歴史(通史)の観点からM・J・エリス、現象学の観点から西村清和、スポーツの観点から大西鉄之祐の著書を対象とし

た。これらの代表的な研究者の考え方の共通項を見いだすことを通して、「遊び」の本質を整理し定義した。

すなわち、遊びは、「真面目さや失敗を内包し、創造性と不確定性を含めたアゴン・アレア・イリンクス・ミミクリを内在する運動に取り組む中で、夢中・没頭という状況を生み出す子どもたちの行為」と定義された。さらに遊びは、「アイデアからルドゥスへ、つまり、運動遊びから運動スポーツ種目へと変遷していく過程に課題の発展性がみられる」と考えられ、「喜びと楽しみの源泉となる生の最も基本的要素の一つ」とであると捉えられた。

以上のことをふまえ、遊びの概念を実践でいかす可能性等について整理・提案した。

### 第3章「小学校低学年における単元カリキュラム試案」

本章では、第1章において提案した領域編成試案をもとに、低学年における単元配列レベルでのカリキュラム試案を提案した。作成する際は、子どもたちの未分化・未組織といった発達段階を考慮し、できるだけ単元数を少なくするようにした。

また、単元は、(i) 運動種目への系統が強く見られる内容を単独で扱う。(ii) 「基本の運動」領域内で、その内容を関連させる。(iii) 「基本の運動」領域と「ゲーム」領域を関連させる、3つの原則で作成した。

ここで作成した単元をもとに、第4章・第5章では、将来の運動種目への系統性が強く見られ、内容を単独で取り扱うのがよいと考えられる「器械・器具を使つての運動遊び」(第1学年)、「水遊び」(第2学年)の実践研究に取り組んだ。

### 第4章 実践研究(I)

#### ー第1学年「器械・器具を使つての運動遊び」ー

変形姿勢での移動・回転運動と、器械運動の種目特性から指定された「腕支持・回転・着地」を中核とする器械・器具

表2. 各単元の内容と結果

学年 単元	教育 内容	実践の有効性を 評価する技能	習得 状況	態度 測定
第1学年 器械・ 器具	腕支持	○倒立姿勢を 3秒保つ	100%	高い レベル 成功
	回転	○手をつかずに 前転できる	85.3%	
	着地	○平地で180° 回転し 音を立てずに 着地できる	100%	

を使つての運動遊び「にんじゃワールドへようこそ!」と名付けた単元カリキュラムを構成し、成果を検討した。表2は、倒立・前転・180°回転着地の習得状況を示したものである。習得状況が高い達成率を示したことから、指定された教育内容は1年生の子どもたちの発達特性に適合していることが認められた。また、体育授業に対する愛好度を態度測定法で測定した結果、子どもたちの実態は「高いレベル」、授業の成否は「成功」と診断され、子どもたちは、友だちとかかわりながら、わかり・できることを通して、楽しんで体育授業に取り組んだことが認められた。

### 第5章 実践研究(II)ー第2学年「水遊び」ー

特殊な環境での移動運動と、水泳の種目特性から指定された浮く・呼吸の確保・移動の系統性を意図して構成した単元カリキュラム「潜って 浮いて 進め!」の成果を検討した。表3は、「呼吸をつづけただるま浮きが5回以上できる」「3回以上息継ぎをして15m泳げる」の習得状況を示したものである。両者とも80%以上の高値を示した。また、体育授業に対する愛好度を態度測定法で測定した結果、子どもたちの実態は「高いレベル」、授業の成否は「成功」と診断され、子どもたちは、友だちとかかわりながら、わかり・できることを通して、楽しんで体育授業に取り組んだことが認められた。

これらの結果から、「水泳」領域は、2年生から設定するのがふさわしいと考えられた。しかし、今回取り組んだ泳法は、「ドル平」であり、子どもの認識の変遷を質的に分析したり、実際の動きを見たり、25m泳げなかった児童のつまづきを整理したりする中からは、「だるま浮き」から「ドル平」に移行することには無理があり、「だるま浮き」から「平泳ぎ」へ移行する方が、より上達することが示唆されたため、本実践で明らかになった留意点を加筆した修正カリキュラムを提案した。

表3. 各単元の内容と結果

学年 単元	教育 内容	実践の有効性を 評価する技能	習得 状況	態度 測定
第2学年 水遊び	浮く 呼吸の 確保	○呼吸を続けた だるま浮きが 5回以上できる	96.9%	高い レベル 成功
	移動	○3回以上 息継ぎをして 15m泳げる	81.3%	

主任指導教員(後藤 幸弘)

指導教員(後藤 幸弘)